

初と終はラブコメで！？

まつ壺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何時も乍らの学校生活を送ってきたのだが、最近、自分の身の回り人が増えた様な…。

凜斗はそんなことで悩んでいた、

自分は静かに暮らしていたのに……

………

あまり人付き合いが苦手な凜斗、

しかし、学校内での生活で友を見つけたり、

ちよつとしたトラブルに巻き込まれながらも凜斗なり学園生活を

楽しんでいくそんな物語。

目次

プロローグ	妹達との戯れ……	1
第1話	在り来りな物語……	4
第2話	優しさと決意……	6
第3話	好機とは散りゆくもの……	8
第4話	唐突こそ至高……	11
第5話	あの頃と今の真……	14

プロローグ

妹達との戯れ…

……………

(違和感を感じる…)

さつきまでは何も無かったのに… 何故だ？

身体を動かそうとしても何かに邪魔をされているような…。

ぼんやりとしてハッキリとした事は分からないが、1つだけなら気づいたことがある。

、今現在布団の中で人肌と触れ合っている。

ってことだけは…。

一見すると恐怖を感じる所だが、自分には見当がついていた。

うん… それも確信的な確率で。

「小魅、梨美… こんな真夜中にどうした…？」

「…ねえっ、姉様、姉様もうバレていると思うんだけど。」

「だっ大丈夫！ まだ、本格的にはバレてないと思うから… 多分…。」

と彼女らはこしょこしょと会話をしているが、これで気づかれていないと思っているのかと言う程のポリュームだった。

「何やってんだか… 気づいているから出て来てもいいぞ！小魅、梨美。」

そう言うともぞもぞと布団が不自然に蠢き出した。

…そして、一瞬静寂が包み…

「お兄さん、お兄さん。」

「お兄ちゃん！ お兄ちゃん！」

などと言って布団をガバツと弾き返してふたりの妹が正体を表した。

「どっ… どうした？ そんなに慌てているが何かあったのか？」

急に出てきたこともあって、妹達と分かかっていても流石に驚いた。

「あの… ですねえ…。」

と小魅が言いかけようとしたが、フツと姉の方を見て助け舟を出してほしそうな顔を梨美に向けた。

「その先は私が言うね、……………」

……………

話を聞く限り、テレビ番組で怖い系の放送があつてたらしい。

(しかし、怖いのが苦手なのによく見るなあ…。)

自分も苦手なのだがそれより梨美の方がもっと苦手なはず、見てみたいと思う気持ちは分からなくもない。

「…お前達、よく見れたなあ…。」

「まあ… ふたりなら何とか見れたよ… 怖かったけど。」

「姉様が居てくれるなら何とか見れましたけどね。」

声のトーンから察すると、小魅の方が梨美より怖いのが大丈夫らしい。

てつきり、小魅の方がダメだと思つてた程だ。

「だからかあ、俺の布団に潜り込んだ理由は。」

妹達に何があつたかを大体の事を理解でき少し安堵した感覚が現れだした。

「ふう…」とひと息して、小魅や梨美の方に目を向けると、何やら『もじもじ』身体をくねらせて何か言いたそうな顔を向けられている。

「んっ? どうした?」と妹達に聞き返す。

そうすると、梨美がクツと顔を布団に埋めて微かな声で、

「お兄ちゃん! 今日ここで寝ていい?」

あまりにも小さい声だが、現在の雰囲気とも重なるとこう言つていると思う。

小魅も梨美が言った事に賛成なのか、布団の中で頷いている。

「そんなこと別に聞かなくても普通に寝ていいぞ、俺も小さい頃はそうやって両親が寝ている布団に潜り込んでいたしな。」

今日の事もあつて、久しぶりに昔の記憶を思い出した気がする。

…………しかし、昔の事を語るのは結構恥ずかしいなあ…。

「えっ!… 寝てもいいの?」

「いいのですか?」

2人ともダメだと思つていたのか、表情と声が明らかに変わつてい

た。

「ああ、寝ていいぞ。俺明日学校だからもう寝るぞ…。」

凜斗は「うーん」と背伸びをし、楽な体制をとれるはずもなく変な体制で目を閉じた。

目を閉じて眠りに入ろうとした時両隣からの、

「おやすみ、お兄さん…。」

「おやすみ、お兄ちゃん…。」

を聞いた瞬間夢の中へと連れて行かれた…。

第1話 在り来りな物語…

「ふあ〜… おはよつ… あれ？小魅と梨美は？」

昨日確かに一緒に寝たはずなのにそこに居るはずの妹達が居なくなっていた。

「勘違いではないしなあ… あっ…」

部屋の中をキョロキョロしていたら、『ある物』が目にはいつてきた。

「今… 8時だと…」

…遅刻であった…。

……………

必死になり荷物をバックにねじ込み、急いで出発した。

呑気に朝ごはんを食べている暇もなかったので、パンを啜えたままの通学になっている。

このままいけば明らかに遅刻する、(これはまずい)と思い電車で行こうと決心する…。

そしてねじ込んだ荷物をかき分けて財布を探す。

…しかし、財布は何処にも無い…。

「やふえ、ふあっほうふいほふれふう」

パンを啜えたままなので上手く喋れないが、(遅れる！)と言うことは伝わっているだろう。

そんな状態になりながらも走り続けていた。

……………

「ハァーハァー… 何とか教室まで来れた…」

完全に息は上がっているし、汗もそこそこかいている。

こんな格好で教室に入るのは結構躊躇するが、背に腹は変えられない。

扉に手を掛けグツと横にすると、生徒はきちんと座り、先生もいた。

「あのですねえ先生… これには深い訳が」

「訳など聞いていない、これはれっきとした…」

……………

結果的には『遅刻』であった。

電車に乗れなかった事もあり仕方がなかったと自分に言い聞かせていた。

「おっ！ 遅刻したのか凜斗！」

「見ればわかるだろう」と言いたそうな顔を夏珠に向け、項垂れる様に机の上にバタツとなった。

「あははっ、いつものお前らしいな」

「いつもとはなんだいつもとは」

そして、ふたりとも笑を零しいつものように話し始めた。

「つと言いたい所だが、凜斗ちよつと聞いてくれ…」

さつきまでの夏珠とは変わり、少し落ち着きがなくなっている。

「ん？ …どうした？」

いつもとは違う夏珠に戸惑いながらも、その言葉に耳を傾けた。

「昨日、転校生が来ると先生が言っていたのを覚えているか？」

「確かに来ると聞いていたが…」

「さつきのHRの時に転校生が顔を出したんだよ… でその話だけどな…」

「ああ、その子が夏珠の好みじゃなかったって事か？」

「全然違う… その逆だ」

と言つて右側の席の方に視線を送った。

そこには、少人数だが人混みが出来ていて、その中心に『その転校生』が笑顔で皆からの質問に答えていた。

「なあ… あれはチートだよなあ…」

夏珠は転校生に視線をあてて、うへえと顔をニマラせて見ている。

「おいっ、顔がやばいぞ…」

「おっと、これは危ねえ… しかしだなあ… 話はここで終わりじゃないんだよ」

などと言つて俺の事をまじまじと見ているが、

「なんだろう…」ものすごく睨みつけられていると感じているのは俺だけだろうか？

第2話

優しさと決意…

「話はここで終わりじゃないと言うのはなんだ？」

凜斗は不思議そうに首を傾げ、夏珠をあんまし刺激しないような喋り方をした。

「いやあ… 大丈夫だ凜斗、落ち着いた…」

少しばかり息を荒立てている事は気にしないでおこう…。

「後これはその話にあまり必要ないのだが、少し回りを見てくれ…」

夏珠の言われた通り顔をうつ伏せたまま、周囲を観察する。

…何とも異状はないの… ん？…

何回かキョロキョロしていると、クラスの男の大半がこっちをじろじろ見ていることに気が付いた。

「えっ!? 遅刻しただけでここまで皆に見られるものなのか？」

完全にうつ伏せて視界を遮断する。

今現在、胸が張り裂けそうになるも必死に落ち着かせようと深呼吸を試した。

しかし、現状は変わらず凜斗の周りには変な空気が流れてしまっている。

「うーん… なんと言うかなあ… さっきの続きが関係するんだよ…」

「お願いだ、早く教えてくれ！」

「それがな、転校生はこの場所の事を全然知らないだろ？」

「うん… それで？」

「だから誰かが転校生に案内してあげようとなつてな、それでクラスの男子全員が（俺がやる！）と言い出して、結果お前がする事になったんだよ」

「は？」 訳が分からない…、

自分は遅れてそこに居なかったのにも関わらず何故俺が？

理由を探すが見つかるはずもなかった。それに理解もできなかった。

「クラスの男子が言い出して、俺になるまでの経路に何があった？」

「話が長くなるが聞いてくれるか？」

.....

「つとと言う訳だ分かったか凜斗？」

「うん…… なんとか理解はできたのだがそれは本当なのか？」

夏珠が言ったことがあまり信じられないが、俺に決まった理由は何となく分かった。

「しかしなあ…… 何で転校生はお前を選んだのだろうか？」

「そんな深い理由はないと思うが、だって男子の皆が案内したいとなつている間で、偶然俺が遅刻していて先生が「お前らなあ…… くん？ 凜斗は遅刻かあ？」みたいな会話が出て転校生はそれを選んだのだろうか？」

これがさっきの会話の流れだった、多分女子は男子の気力が強すぎて引つ込んだと思う。

「……今思ってたけど、俺、幼馴染としか喋った事ないけど…… どうしよ夏珠！」

泣すがるように夏珠に問う、しかし返ってくるのはいろんな感情詰まった苦笑いだけ。

「お前って本当に人付き合いが苦手だよな、この機会に転校生と喋って解消したらどうだ？」

「俺にそんな事が出来るほどの勇気があるとしても思っているのか…… はあ、いったいどうすれば」

「まったく…… 仕方がないなあ凜斗は、お前が案内している時に後ろから付いて行つてやるよ」

「それは本当か？ でも何故変わってくれない？」

「お前の為でもあるんだからな……」

「そうだよなあ」と納得する、

夏珠の変わつた優しさが出ているの…… だろうか？

そんな会話を挟みつつ、案内をする事に決めた。

多分普通に終わってくれるだろう……。

?? ピンツ／＼

ん？ 今フラグが立ったような……？ まあ、気のせいかな。

第3話

好機とは散りゆくもの…

1時限目、2時限目と何事も無く終わっていき、さつきまでのやり取りが無かったような錯覚まで起きる。

しかし、右側の席に座っている転校生を見る度ふと思い出す。

(放課後に転校生を案内すると…。)

あと、周りからの視線…。

「まあっ、どうにかなるだろう… なるよな」

とポツリと口から言葉が漏れる、まとまった安心感が欲しいのだと気づかされた。

そんな不安を抱え、時間は少しづつ進んでいく。
限られた時間を吸い尽くすように。

……………

「今日はよろしくお願いします凜斗さん」

ニコツと完璧な笑顔とともに凜斗の前に転校生は現れた。

そう、現在の時刻は午後5時になる前ぐらいだ。

「あっ、こっちこそよろしくお願いします」

言いたい言葉の前に「あっ」と出ているが、

…緊張しているんだ… 許してくれ。

「まずは何処を紹介してくれるのでしょうか？」

「あっ、えっと… うーん何処に行きたいですか？」

「ならふたりきつ… 音楽室等ですかね」

今明らかに何が聞こえた気が？ まあ勘違いだろう…。

大体の男子はこう言う勘違いで振られたりしている事が多いと聞く、

気をつけておかないと。

「音楽室だったらこの校舎の4階だよ行ってみる？」

同意を求めるとような声質で転校生に尋ねる…。

…見れば分かるが、行ききたそうな顔はしている…。

「どうします？」と凜斗は再度転校生に問うと、

転校生が「はい…」と小さな声で俯き返事を返した。

しかし、何故だろうか俯いているその頬が少し紅く染まって見えるのは？

さつきと同じ勘違いなんだろうとは思う、こう言った経験は初めてだから勘弁してほしい…。

そうして、放課後の校舎の階段をコンコンツツと足音を鳴らして4階まで上がっていく。外では部活をやっているが現在その掛け声すらも聞こえない。

(やっべえ… 変な汗もかいてきたし… 本当にこの先が思いやられるな…。)

汗をかいているのがバレるのはすごく恥ずかしい、少し転校生との距離を置いてみることにするか。

ほんの少しだけだからバレることは… え？

：実際に距離は置けた… しかし、置いたその隙間を直ぐに詰めてくるのはどう対処すればいい?…。

感じ的にはこうだ…。

- 1、自分が少しズレる。
- 2、ふと、安心して転校生をチラツツと見る。
- 3、転校生が間近に来ている!?
- 4、またズレる。
- 5、また間近。
- 6、またズレるが壁がその行動を遮る。
- 7、逃げ道を失くす…。

8、GAME OVER!!

ぎやああああ… なんだこれは…?

何処ぞの鬼畜ゲーだよと内心焦りと緊張が混ざり合って凄いことになっている。

「あのお… どうされました?」

「これが落ち着くのです…」

「えっ! でもお…」

「落ち着くのです」

「はい…」

と押し負けて再び密着状態になってしまいました…。

(もしかして恋愛フラグか?)

そんな事を考えてしまうがこんな美少女と付き合えるスペックはゼロに近いし… うん、考えるのをやめよう。

もう何が何だか分からなくなりつつも、目的の音楽室に付いた訳だが。

これってもしや… いやいやそんな事は無いか。

第4話

唐突こそ至高…

「淡い期待を持っている?」と聞かれたら、「持っていない!」とは言い難い…。

それが、今の現状なのかもしれない。そんなくだらない妄想を描きながら、現実へと意識を連れ戻らされた。

「やっぱ、放課後の音楽室って雰囲気があつていいと思いませんか? 凜斗さん?」

「あつ… うん、そうだね」

「どうしましたか、ちよつと慌てている様に見られますが?」

「いやあつ気にしないで、少し考え事をしてただけだから」

「そうなんですか?」と心配をしてくれる辺り、誰かさんとは大いに違うな……。

……………

「ん、美紗希どうしたの?」

「えっ急にどうした?」

「あれ、今私を事と呼ばなかった?」

「呼んでないよ、そんな事より早くこれを終わらせよう… もう放課後だし」

…今、確かに誰かから呼ばれた気がしたんだけどなあ…

現在の状況を用いて考えてみるが、教室には私達2人しか残ってないので謎が深まる幼馴染だった。

……………

「それじゃつ、次行ってみる?」

先を急ぐように転校生を唆す、唆す理由は単純だ… 今にも理性が失われそうになっている…。

「うーん… 案内はここまででいいかなあ…」

「へふえい!」ちよつと腑抜けた声が漏れた、解放感と何だろうかこの急展開は?」

もしかして、俺と一緒に学校を廻るのが嫌なのか？

または、汗： 臭かった!？」

突然に断られた事によつて凜斗はパニックに陥っていた。

それはそうだ： 理由が分からないと言うのは結構怖いものだ。

しかし、転校生の顔を見るがそんな風には感じ取れない：何故？

凜斗はその謎多き言葉の意味を考えると、転校生は窓の方へ近づき遠くにある夕焼けを見つめ、余韻に浸りながら言葉を零す。

「うーん： 本当はね、まだ一緒にこの学校を廻ってみたかったよ：」

「へふえ!？」 2度目の腑抜けた声が漏れた、

：流石に何がなんだが分からなくなってきた：

「えっ：とお、それつてどう言うこと？」

「言葉の通りだよ： やっぱり昔のようにはいかないな：」

転校生の言葉に違和感を感じている、

：『昔』とはいったい何だ？：

転校生とは初対面のはず、いや： 何処かで会ったことが：

悩むが一向に思い出せない。

誰かと間違っている可能性がないとは言いきれないしなあ：

凜斗は転校生にいつ会ったのかを聞き出そうと、転校生に向かって歩き出した時だった。

(スウー) と後ろにある扉が開いた音が聞こえた。

もし知り合いに会ったりしたら、変な噂が広がってしまったって転校生に迷惑がかかってしまう。

流石にまずいと察しすごい勢いで振り返った。

「りつみとおお！ 課外終わったから一緒に帰ろうよお、もお、教室にも居ないから結構探しまわったんだよ！」

：おっと、誰かが来たようだ：

：うーむ、多分知らない人だろう：うん、そうだ：

しかし、そう思っても現実は変わらなく、

よりにもよつて 幼馴染の福元 沙夜香が来てしまっていた：

「あれえ：何で此処に沙夜香が？ 今日是用事があるって言ってなかった：？」

「そうだったっけ？ まあ結果オーライだし一緒に帰ろおおおおお!!?」

沙夜香は凜斗『だけ』だと思ってたらしく… こんな状況を見てしまったらねえ…。

(それはねえ、他人から見たら俺… 女子の後を追ってきたストーリーにしか見えないしな。)

「何、凜斗？ 襲うの？ 襲うんでしょ？」

「いやいや… 流石にそんな事したら捕まるし… てか、解釈おかしくない？」

「へえー襲わないんだ… じゃ、こうバツバツバツバツするの？」

「おまつその動きやめえ！ 変な勘違いされたらあ… ですよねえ」

凜斗が転校生の方に振り向くと、顔を俯きふるふるつと震えていた。

しかし、「ふふっ」などの声が漏れているのに気づく。

「やっぱり、昔ながらの2人ですねえ」

にはあつと笑顔を零し、懐かしむかのような声をしていた…。

おつと、隣で沙夜香が「えっ！ もしかして…」と驚きげな表情をしていたのだが… 何故だろう、どうして俺は…、あれ？ もしかして…。

第5話

あの頃と今の真…

「もしかして…… 深沢 絵凜花か!」

今さつき気付いてなんだが、あの絵凜花がこの高校へ来るとは思ってもみなかった。

その理由はと言うとなあ、

ん? そんな話聞きたくない?

…まあ、無理にでも俺の独り言に付き合ってもらおうけど…

あれは、幼稚園生の頃だった…。

昔、凜斗と沙夜香と絵凜花は3人も家が横に連なっており、よく

3人で公園に行き遊んでいたのを事があってだな。

たまに、遠くに行つて3人も仲良く親に怒られたりと、今になつてもあの頃のインパクトが強すぎて多分これからも忘れられないだろう…。

勘のいい人は今の話を聞いて大体分かったと思うけど、絵凜花は親の転勤で遠くの学校に転校して行つた。

それが、最後の別れになったのだが…。

…何故今、絵凜花が目の前に居るのか?

その事に懐かしみと驚きで顎が凄いいことになっている。

(まあ、顎はどうでも良くて…。)

「やっぱり、絵凜花ちゃんだあ!」

「そうですよ、絵凜花ちゃんです」

「ごめん、案内していたのに全然気づかなくて…」

「もおー! 全くですよ! わざとアピールしていたのに気付かないなんて」

「ほんつとにすみません!!」

久しぶりの感動の再開を果たした、しかし、気になる点がひとつ存在していた。

「なあなあ、ここに転校して来たってことは、親がまた転勤したの?」

思っていた事が真で口から出てしまった。

相手のプライバシーとかあるだろうし嫌な思い出させて…。

「うっ… うん、そうだけどお!？」

…あれっ? あまり嫌がっていなかった?…

昔にもさっきの反対の言葉を言ってしまったことがあり、その時は、別れるのが嫌だったから泣きじやくりながら怒ってきた事があった。

…ちよつと待って! よく見ると嬉しがっていないかあ!?!…

絵凜花の心境性が全く分からなくなってきてしまった。

普通なら「その言葉不謹慎だよ!」とか若干怒りながら言ってくるはずだったタイミングに嬉しがるとは。

「恐れ入りました…!」

漏れるように口から言葉が溢れ出す。

この漏れについてはどうすることも出来ない…。

「どうしたの? 凜斗?」

沙夜香も凜斗の意味不な行動に不思議がっている。

「本当に大丈夫ですか?」

この空気を作り出している元凶も心配そうに話しかけている。

「ああ… ごめんなちよつと考え込んでいて…!」

「まあ、凜斗のお得意の顔芸も見られたから、謝らなくても」

「おい、俺のお得意の顔芸について後で話してもらおうか」

「嫌だよん! じゃあね絵凜花ちゃん!」

「はい、また明日」

逃げるように沙夜香は図書室をあとにした。

1番出会ってしまったてはいけないと思っていたが、正直のところ沙夜香が居なかったら結構危うかった。

……………。

「もうすぐ夜になるし家まで送ろうか?」

さっきの話し合いで結構時間をくってしまった、それに、だんだん夜に近付いてきたからとゆう事もあり帰ることにした。

「そうですね、送ってもらおうかな」

「なら今すぐにも帰ろっか、もうすぐとは言ったけど結構暗くなっているからね」

「はい」とその一言と共に音楽室を後にした。

月の光を浴びながら夜道をふたりで歩む……。

「ここ最近本当に寒くなつたよねえ……」

そう言つて絵凜花は自分の手に吐息をかけながら、凜斗が身に付けていたマフラーをチラチラと覗き込んでいた。

「寒かつたよね、このマフラー使う？」

「はい、言葉に甘えて！」

笑顔で凜斗からマフラーを受け取ると、（ふさあつ）とマフラーに顔をぐりぐりと擦り合わせていた。

たまに（スーハー スーハー）と聞こえてくるのだが、自分の聞き間違いだと思いたい。

「この懐かしい匂い好きですよ」

…聞き間違いなどありませんでした…

匂われるのはここまで恥ずかしいと思つてもおらず、それにその匂っているのが女の子とは。

「そお？ そう言つてくれると何だが嬉しいよ」

まあ、嬉しいとゆうのは誤爆だけでも……。

「はい！ いい匂いです」

「うっ…」褒められているとは分かっているのだが、素直になれず胸を打ち付けられる気持ちになる。

照れ隠しと同じ部類だと思う。

「未だに慣れていなかったんだ、こうゆう時は「うへえ」とか言つてればいいの」

緊張切っている凜斗に良かれと言つてくれたとおもうが、何処かで似た表現している奴がいたようなあ…… あっ…。

完全に脳裏から消え去っていた夏珠の事を思い出した。

夏珠は今どうしているが全く想像出来ない、てか、そもそも夏珠あの時近くに居たかすら分からない。

まあ、居なかった時は…… おっと！ この話は後で考えるところ。

「そう言えば絵凜花の家ってどこら辺にあるの？」

「えつとですね… あっちの方角にありますよ」

「あっちと言ったら絵凜花が前住んでいた家の近くか？」

一応、俺の家と沙夜香の家とも同じ方角だし、前と余り変わらないかもしれない。

「そうと言えばそうなんだけどねえ… うくん」

さつきから絵凜花の発言が曖昧って言う事は何か隠し事している。

昔は分からなかったが今となってははつきりとわかるようになった。

それもあれも… あの事件がきつかけだが。

「あつ！ ちよつと用事思い出したから先行くね、後これ… ありがとうね」

そう言うと、絵凜花は凜斗の首に手を回してさつき渡していたマフラーを掛けてくれた。

絵凜花の手の温もりが直で身体に伝わる。

…簡単に表すともものすごく恥ずかしいです…

「うっうん… 分かった、じゃあまた明日」

「明日？」

「えつ、今日はもう帰るんじや？」

「あつ！ 明日ね、それじゃ」

ビクツとなりながらも暗がりを濛濛と走り抜ける、自分の考えなのだがさつき言った通り何かを隠す為に急いでいるんだと思う、てか、それぐらいしか考えられない。

「うっ… 本当に冷えるな…」

巻いてもらったマフラーをぎゅつと握りしめ、身体を縮めて家へと

足を運ぶ。

家で待っている小魅と梨美の事を思い浮かべながら。